様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３３７４

研究課題名（和文）近代朝鮮と交隣－事大交隣から交隣、そして外交へ

研究課題名（英文）Forming of modern Korean diplomacy with neighbor countries during the late 19th century

研究代表者
森　万佑子（Mayuko, Mori）

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：３０７９３５４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：朝鮮は「事大交隣」を外交の基軸とし、中国との事大と中国以外の国々との交隣を有していた。19世紀末には、在来の中華秩序と併存して近代国際関係も有した。朝鮮がいかに条約関係に対応し、外交を近代化したかについては多くの研究がある。しかし事大交隣の実態や、それが条約関係の導入に伴っていかに変容し、転換していったかについては十分な議論がなされていない。そのため本研究では、東アジア在来の秩序構造の実態を解明する目的で、交隣であった日朝関係や、事大である清朝・天津での中朝関係がいつ・いかなる契機で外交関係へと転換していったのか、あるいはどのように変容したのかについて検討する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本テーマに関する韓国の研究は、19世紀末の朝鮮外交の近代化に主眼を置き、国内の研究は、近年、朝鮮外交の「戦略」に着目してきた。しかし、朝鮮外交の近代化の基準や、戦略の具体的な方向性については十分な議論がなされていなかった。本研究は、19世紀末の中華秩序の変容に伴って生じた事大交隣の変容・解体過程と、日清戦争での日本の勝利による東アジア国際関係の変容に注目することで、19世紀末の朝鮮の清朝・日本との外交と、20世紀初頭の大韓帝国の日本・ロシアとの外交の連続・非連続を研究し、先行研究を補った。これは、日本史で議論されてきた「韓国併合」過程を、韓国史から捉え直す学術的意義をもつことにもつながった。

研究成果の概要（英文）：　Korea’s foreign relations during the late 19th century were primarily diplomatic in nature, but they did not always align with the practices of modern diplomacy. This was deeply connected with the concepts and practices of Chinese hegemony over Korea and the idea of gyorin (friendship with neighboring countries). Originally, gyorin were in the Chinese world order, but they began to diverge into distinct concepts.
This study focuses on how the Korean government managed its diplomatic efforts and international relations within this context. As one approach to this issue, this study addresses the development of Korea’s foreign relations and the formation of its diplomatic policy during its modernization; explores the development of Korea’s foreign policy from the late Joseon Dynasty through the Korean Empire (1876-1910).

研究分野：朝鮮近代史

キーワード：朝鮮近代　高宗　韓国併合　中華　属国自主　交隣　事大

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、19 世紀末の朝鮮の政治外交の基軸であった「事大交隣」が、国際社会との関わりのなかでいかに変容し、「事大」と「交隣」、さらに「外交」へと変化していくかを明らかにするものである。朝鮮政治外交史研究は、近年、活況を呈しているが、「朝鮮外交がいかに近代化したか」あるいは「朝鮮外交がいかに近代国際関係に適応したか」について着目するあまり、東アジアの既存の世界秩序である中華世界との関わりが等閑視されがちだった。

そのため、本研究では、19 世紀末の朝鮮にとっての「事大」や「交隣」とはどのような意味をもったのかという観念や実態に関する基礎的研究を行う。

２．研究の目的

朝鮮から見た「事大」と「交隣」を解明することで、これまで、中国の視点から描かれてきた中華秩序を再考することを目的とする。中華秩序とは、中国と周辺国・地域との二国間関係の束であると指摘されるが、それは中国から見た場合の見え方であり、中国に朝貢し冊封される周辺国・地域からみた場合も同様の見え方になるのかは明白ではない。

西洋近代の条約体制よりも、東アジアの在来の体制といえる中華秩序にまず着目し、そこから議論を構築する研究はいくつかなされてきた。ただ、秩序の中心である中国について関心が集中したため、中国から見た他国・他地域との関係性の研究が多く、あるいは朝鮮に関しても、朝鮮の知識人や儒者の思想を中心テーマに据えて、思想的系譜を分析する研究が主流であった。本研究は、そうした研究の成果に学びながらも、日本、天津といった中華秩序の周辺ともいえる場に対する、朝鮮（朝鮮政府）の見方・視線を明かにする。そうした中華秩序の周辺に朝鮮がいかに関わったのかについて研究することで、朝鮮における事大交隣とその分岐、そして近代外交の形成について考える。そうしたところに先行研究との差別化があり、意義もあると考える。

具体的には、中国の天津に派遣された駐津大員（のち駐津督理通商事務）と、日本と朝鮮の外交、特に韓国併合に至る過程に着目して、朝鮮にとっての「事大」や「交隣」がいかなるものであったのかを明らかにした。

３．研究の方法

朝鮮史はこれまで一国史あるいは二国間関係で論じられることが多かったが、本研究は朝鮮政府の史料を主としつつも、中国や日本、アメリカやイギリスなど関係各国の史料を駆使して史実を構築するマルチ・アーカイヴァル方式を採る。さらに他国史の研究成果も踏まえた学際的な議論を展開することで、近代東アジア国際関係に朝鮮を位置づけようとするところに独自性がある。

また、先行研究が朝鮮の「政治外交の近代化」や「近代国際関係への参入」などと論じてきた、19 世紀末の対外関係を、前近代的な概念と思われがちな「事大」「交隣」の観点から捉え直して外交の形成過程を論じる着眼点をもつ。さらに申請者が発掘したソウル大学校奎章閣韓国学研究院所蔵の新史料を活用する点にも創造性を有する。

４．研究成果

（１）天津における「事大」の変容

朝鮮政府は 19 世紀末に、中国・天津に派遣した駐津大員（のち、駐津督理通商事務に改称、以下、駐津督理）の活動実態のうち、とりわけ交隣の理念である「敵礼」概念に対する駐津督理の理解が分かる事例として、1890 年の趙太妃（神貞大王大妃）逝去時の服喪問題に関する史料を発見した。この史料を、解読・分析し、中国の儒教経典なども読み込みながら、「天津からみる朝鮮の『交隣』－事大における敵礼の模索」（岡本隆司編『交隣と東アジア－近世から近代へ』2021 年、名古屋大学出版会、232～261 ページ）にまとめた。

加えて、駐津督理が果たした役割について、これまでの一連の研究（拙著『朝鮮外交の近代－宗属関係から大韓帝国へ』名古屋大学出版会、2017 年、第 1 章・第 2 章および、拙稿「天津からみる朝鮮の『交隣』－事大における敵礼の模索」前掲書）では、外交・交渉面に着目してきたが、駐津督理は、本来、「中国朝鮮商民水陸貿易章程」によって派遣された商務を管轄する役人であったことに照らし、天津での貿易・通商面に着目して、その役割を分

析した。とりわけ、高麗紙の運搬をめぐる駐津督理と天津海関道との交渉を史料から発見し、高麗紙運搬からみる朝清陸路貿易の実態、およびそれへの列強の関わり方を研究した。本研究は、「天津における事大の変容－高麗紙をめぐる議論に着目して」（2021 年度東洋史研究会大会、2021 年 11 月 7 日、オンライン、招待講演）として発表し、拙稿「中國朝鮮商民水陸貿易章程による中朝關係の變容（1882～1892 年）」『東洋史研究』82 巻第 4 号、2024 年 3 月、83～115 ページに掲載された。

（２）日本と朝鮮の「交隣」

日本と朝鮮の関係について、一つ目は、釜山と対馬の関係から、日朝関係に迫り、そこから事大交隣の実態を浮かび上がらせる研究として、「交隣の論理と中華－一八七四年「密咨」の衝撃」（岡本隆司編『交隣と東アジア－近世から近代へ』2021 年、名古屋大学出版会、132～155 ページ）を発表した。本稿から、1870 年代前半までにおいて、中国と朝鮮の関係である「事大」は、朝鮮の中国以外との関係、つまり日朝関係である「交隣」の状態を把握しておらず、「事大」と「交隣」は関連性がなく展開されていたことが指摘できた。つまり、当時、日本と朝鮮は「書契」問題を抱え、日朝関係は停頓していたが、中国はその状況を朝鮮から報告があるまでは知らず、朝鮮から報告があっても「属国」の「内政外交は自主」の原則から関与はしなかった。つまり、「書契」問題は、日本側が書いてくる書契の内容以上に、それを受け取る朝鮮側の国内政治状況に影響を受けていたのではないかと考えられる。

（３）韓国併合に至る大韓帝国の外交

近年、日本の朝鮮史研究では朝鮮外交の「戦略」についてしばしば議論されている。ただ、そうした「戦略」がどういった考えを基盤として、どのような政策を遂行するために立てられたものかについての議論は未だ十分ではない。朝鮮の対外関係は一義的には外交であるが、外交を意味しない側面もあり、それは「事大」「交隣」の概念や行為と深く関わっていたことが考えられる。元来、二つで一つであった「事大交隣」が「事大」と「交隣」に分岐していく点に着目し、朝鮮政府の外交や、国際関係との切り結び方を研究する。

そのような問題に取り組む一つの方法として、本研究では、近代朝鮮の対外関係の展開と外交の形成に、中国の存在、より具体的には中華（中華世界・中華秩序）の存在形態が深く関わっていることに留意し、朝鮮王朝から大韓帝国への外交政策への展開を論じようと試みた。その延長上として、従来は日本政府や日本側の人物が主体となる韓国併合の歴史を、朝鮮国王・高宗（のち大韓帝国皇帝）を主語にして描くことで、先行研究の成果とは異なる新しい一面を提示した。

日清戦争後の朝鮮が「自主独立」であることを対外的に明白にした上で展開した国内政治・外交交渉については拙著『韓国併合－大韓帝国の成立から崩壊まで』（中公新書、2022 年）の出版に結実した。加えて、拙著を踏まえた講演（例えば、「第 13 回　連続講座・日韓の「歴史問題」の論点を探る「韓国併合」から考える日韓関係改善の模索」東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構韓国学研究センター、2023 年 1 月 20 日、http://www.cks.c.u-tokyo.ac.jp/event_back/kf_013.html）や、各所で開催された書評会での意見交換を通して、当初の計画以上の成果を得ることができた。

また、拙著『韓国併合』は、2022 年度サントリー文化財団海外出版助成を受給し、2024 年 3 月に韓国語版『韓国併合－論争を越え、再考する大韓帝国の軌跡』を翻訳出版した。本書は韓国の主要紙で書評が掲載された他、『ハンギョレ新聞』2024 年 4 月 3 日にはインタビュー記事を取り上げていただき、中華世界から大韓帝国成立を見通す意義を説明した。

（３）ロシアと朝鮮の関係

上記の研究を通して、1885 年前後の朝鮮国王・高宗が関与したとされる朝露密約に端を発する朝露関係、さらには大韓帝国期に高宗がロシア公使館に避身するなどの高宗のロシアに対する認識や、対露外交についてはさらに検討する余地があることが分かった。日本では当該時期のロシア外交文書の日本語訳が出版されていないが、韓国ではロシア文書の韓国語訳作業が進み、書籍刊行も行われている。そうした史料を駆使しながら、2023 年度第 28 回「東アジア近代史学会研究大会」で「大韓帝国期の韓露関係－高宗の対露認識の変化」（招待講演）と言う題目で、以下のような報告をした。

大韓帝国の対外政策は、親露反日政策とみる見方が通説でありながら、中立化政策など多様な外交政策にも関心が広がった。こうした研究は、大韓帝国の外交政策を多面的に明らかにすることに貢献したが、ほとんどが高宗の側近勢力（勤王勢力）や駐韓ロシア公使、駐韓日本公使の動きから論じており、高宗に着目した研究は少ない。そのため、本報告では、韓

国で翻訳されたロシアが保管する対韓文書のうち、高宗の親書や高宗に関するロシア側の報告文書に着目し、それを既存の研究成果と結びつけることで、高宗の対露認識の変化を整理する。また、大韓帝国期の高宗の対露認識を明らかにするために、中国と朝貢・冊封関係を維持していた時期に遡って、①事大字小の原則に則って朝鮮が中国に公然と「保護」を要請できた 1895 年までの時期に対露接近した事実と、②1895 年に「独立自主」国となった 2 年後に露館播遷した事実、そして③日露開戦や日本の保護国にされていく過程でロシアに支援を要請した事実といった一連の流れから、高宗の対露認識の変化を論じた。

以上の報告は、今後、ロシアでの調査によって資料や分析をさらに加え、論文にまとめる予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 森万佑子	４．巻 82-4
２．論文標題 中國朝鮮商民水陸貿易章程による中朝關係の變容（1882～1892年）	５．発行年 2024年
３．雑誌名 東洋史研究	６．最初と最後の頁 83-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森万佑子	４．巻 905
２．論文標題 書評：姜昌一著『近代日本の朝鮮侵略と大アジア主義－右翼浪人の行動と思想』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本歴史	６．最初と最後の頁 105－107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森万佑子	４．巻 96
２．論文標題 高校生に知ってほしい「韓国史」教科書に描かれる植民地期	５．発行年 2023年
３．雑誌名 じっきょう－地理・公民科資料	６．最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森万佑子	４．巻 12
２．論文標題 Q&A 日朝修好条規から考える「不平等」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山川歴史PRESS 歴史総合	６．最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森万佑子	4．巻 893
2．論文標題 書評：大澤博明著『明治日本と日清開戦－東アジア秩序構想の展開』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森万佑子	4．巻 ウェブサイトのみ
2．論文標題 「大韓帝国」を通してみる朝鮮半島の現在	5．発行年 2022年
3．雑誌名 新潮社Foresight	6．最初と最後の頁 ウェブサイトのみ
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Mayuko Mori	4．巻 79
2．論文標題 The Relationship between Sadae and Gyorin as Seen in the Activities of the Trade Affairs of Korean Consul to Tianjin: Analysis of Volumes 3 through 5 of the Collection of Diplomatic Documents from Old Korea	5．発行年 2020年
3．雑誌名 韓國史學報	6．最初と最後の頁 225～264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森万佑子	4．巻 3459
2．論文標題 書評　三谷博著『日本史のなかの「普遍」』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森万佑子	4．巻 262
2．論文標題 近代東アジアの外交	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史と地理―世界史の研究	6．最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森万佑子	4．巻 23
2．論文標題 朝鮮政府の明治初期外交への姿勢転化 ― 一八七四年の「密咨」到着に着目して ―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東アジア近代史	6．最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　8件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 森万佑子
2．発表標題 大韓帝国期の韓露関係－高宗の対露認識の変化
3．学会等名 東アジア近代史学会　2023年度　第28回研究大会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Mayuko Mori
2．発表標題 Resilience in Japanese-Korean Relations
3．学会等名 The 3rd IAFOR International Conference on Arts & Humanities in Hawaii (IICAH2023)（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 森万佑子
２．発表標題 「韓国併合」から考える日韓関係改善の模索
３．学会等名 東京大学 連続講座・日韓の「歴史問題」の論点を探る（第 13 回）（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 森万佑子
２．発表標題 書評：木宮正史『日韓関係史』
３．学会等名 東京大学 韓国学研究センター　（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 森万佑子
２．発表標題 『韓国併合－大韓帝国の成立から崩壊まで』書評会
３．学会等名 日本国際問題研究所「東アジア史研究会」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mayuko Mori
２．発表標題 韓国併合－大韓帝国の成立から崩壊まで
３．学会等名 高麗大学校　海外碩学招聘講演（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 森万佑子
２．発表標題 森万佑子『韓国併合』（中央公論新社、2022年）の書評会
３．学会等名 東アジア近代史学会　研究例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森万佑子
２．発表標題 朝鮮史研究会第58回大会『高麗・朝鮮における国際交流の諸相－伝播・接触・受容－コメント』
３．学会等名 第58回朝鮮史研究会大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森万佑子
２．発表標題 天津における事大の変容－高麗紙をめぐる議論に着目して
３．学会等名 2021年度東洋史研究会大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mayuko Mori
２．発表標題 ‘Rethinking the “Japan Problem” in the Context of Dual Sinocentrism in Choson Korea,1868–1874'
３．学会等名 AAS-In-Asia 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

1．著者名 森万佑子（崔德壽訳）	4．発行年 2024年
2．出版社 The Open Books	5．総ページ数 392
3．書名 韓国併合－論争を越え、再考する大韓帝国の軌跡（韓国語）	

1．著者名 森万佑子	4．発行年 2022年
2．出版社 中央公論社	5．総ページ数 256
3．書名 韓国併合－大韓帝国の成立から崩壊まで	

1．著者名 岡本 隆司、石田 徹、中 純夫、石川 亮太、森 万佑子、朴 漢珉	4．発行年 2021年
2．出版社 名古屋大学出版会	5．総ページ数 380
3．書名 交隣と東アジアー近世から近代へ－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関